せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一一三号（一日発行）
平成十一年二月一日

年表で読む古平の歴史

《21》

■寺子屋の教育

日本では江戸時代の中ごろから、一般家庭の子どもたちは〈寺子屋〉に通うことが普通だったようです。それより前の時代は、お寺に預けて〈寺子〉として学ばせ、ある時期を過ごさせていました。武士の子どもであれば、それぞれの藩でつくった学校〈藩校〉で学んでいましたが、そのほかにも特色のある教育機関がありました。

寺子屋では『読・書・そろばん』といわれるように、まず日常の生活に役立つ最小限度の知識・技術を授けることが目的でした。

■古平での教育の始まり

当時、蝦夷地という全く新しい土地に移住して来た人たちにとっても、子どもの教育は大きな問題でした。

時代が明治に変わろうとする十年ほど前、当時、禅源寺は新地町にありましたが、住職であった天山和尚や漢方医の熊谷昌庵が、読み書きを教えていたといわれます。また明治二年、沢江村に住んでいた、元伊達藩士の松岡直之助が寺子屋を開いたそうです。

そのほかにも、文字の素養のある人たちが近所の子どもたちを集め、おりをみては読み書きなどを教えていたようです。

■北海道では教育は二の次

明治三年のこと。開拓使は政府への意見書の中で、「北海道でまずしなければならないことは海運を盛んにし、土地の開拓を進め、産業を起こすことであって、教育も大事ではあるがそれはまだ将来の問題である。」というようなことを述べていました。

■『学制』が公布になる

やがて明治五年八月、はじめて『学制』が制定されましたが、これは全国を八つの区域に分け、学校の系統を大学・中学・小学の三段階にするというものでした。

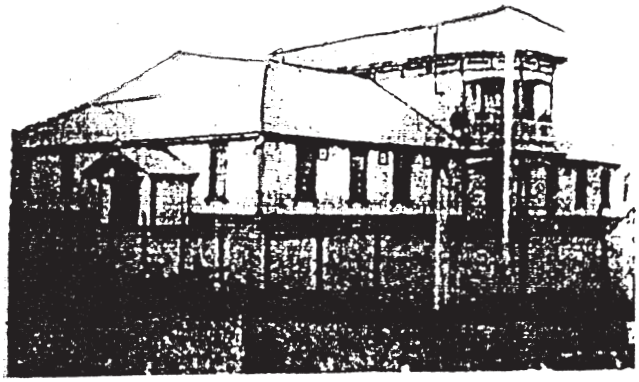
小学校は、原則として国民すべてが卒業するものとしましたが、経費は受益者負担ということでした。

また、北海道は当分の間、第八大区（東北地方八県）に含まれることになりましたが、これは、北海道全体に『学制』を実施するのはまだ早い、という政府の考えによるものでした。

これは、「北海道では住民一般の生活が苦しく、その生活の道も立っていなくて、官からの援助に頼っているのが現状である。まず産業を督励することが先で、今は『学制』を実施できるような状況ではない。」と考えていたからです。

このようなこともあって、本州などのことを内地、北海道のことを外地と呼ぶ習慣がうまれて、戦前だと、大方の人は本州方面を内地と言っていました。

しかし、学制が公布されて二、三年後には、鰊漁が盛んであった日本海沿岸の各地に学校が建設されるようになりました。



〈モダンな校舎といわれた古平浜中学校〉

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【14】

「よくまァ、四十年も毎日日記をつけたもんだ」という感嘆と驚きの声と、「古平のむかしのことがよく分かって、ほんとに楽しい。」などなど、多くの方からの声が聞かれますが、「一日分の全文をそのまま見たい」という方もおります。そこで大正五年に、古平で自転車競争があった日の日記を原文のままご紹介します。

× × ×

六月二十五日　晴

今日ハ自転車競争当日ダ、朝五時ニ起キタ、空モヨー阿しく時々パラパラとやって来る、雲行きも早ひので如何ならんと思ふタら幸ひ晴れタ、七時ニ支度し出掛けタ、自転車ニ乗り洋装ハ軽く早ひ、風が強いので困る、支度ニかかり八時半ニ漸く一回初まる、小樽から管原、宮本、弐人選手来る、午前十五回やり、中食ハ寿し一向ウマクナイ、午後から人出非常ニ多ク広いく阿の場所も一杯ダ、二流選手三五周競争ハ実ニ見物で阿った、一流選手五十回ハ木村、竹波、(中一)小山、今の五人で阿った、遂ニ竹波、木村、今、(中一)小山の順で、竹波がチャンピヲンニなった、大カッサイで六時終、四時頃よ里風止む、跡片付して記念写真ヲ写し九時に帰る。

六月二十五日

旧西暦五月二十五日

みつのとみ

六月　週日一七・日一八九日　一九四

地久節

天候	温度
晴	
来客	替番
用事	受信
摘要	

○彼も人なり我も人なり

（明治一七年）誕降御下陛后皇　（明治三五年）誕生御宮淳子皇二第

遥かなる故郷の思い出

わが闘病生活①

[53]

橘　義春

東京の空の下に住んでいても、思い出すのは、やはり生まれ育った故郷のことです。

そして、お世話になった古平の方々のご健康を願いながら、また、書いてみました。

× × ×

誰でも〈無病息災〉であることを祈りながらも、そうは問屋がおろしてくれないようで、若い頃からあまり病気らしい病気をしたことのない私が、ここ五年くらいの間に、いつの間に疫病神に取りつかれたのか次から次と、これでもか、これでもかと病気に追いかけられている。

その間に、棺桶に片足を突っ込みかけたことが二度ほどもあった。幸いその一歩手前で、疫病神がストップをかけてくれたか、戦争で死に損なったことが死に神のお気に召さなかったか、三途の川の手前で「シッ、シッ」と、二度も追い返されてしまった。

「ありがとう、死に神さま」と、手を合わせたい気分である。われながら自分の生命力の強さに驚いているが、これも設備の整った大学病院と、よい先生にめぐり会えたのも幸運だったかも知れない。もうひとつは、私の「病気に負けてたまるか！」という前向きの精神力に、死に神の方がギブアップしたのではないかと思っている。

相撲取りの世界では、舞の海は技のデパートといわれているそうだが、私は、さしあたり病気のデパートというところか、と言って家内を笑わせている。

テレビの健康に関する番組で、みのもんたの『おもいっきりテレビ』や、NHKの『きょうの健康』、衛星放送の『健康ほっとライン』などをよく見て、自分の健康管理の参考にしている。

私は若い頃から医学や、薬草などの本に興味があり、今でも相当数買って持っている。いろいろな病気に対してはそれなりに予備知識があるので、度重なる病気にも精神力と共に、病気に関しての知識があって対応できたものと思っている。

小学校時代の同級生で友人の、港町で以前理髪業をしていた北政道君も、私と同様に医学の本を読むのが趣味で、いろいろな病気についてくわしい予備知識をもっている。

彼の奥さんもよく人に、「家にもひとり医者がいる」と苦笑しているそうだ。

病気にかからないためにも、病気についての知識を身につけることはよいことだ。

東京の私の知人で、思いこみの激しい人がいる。心臓に関する医学書を読んでいたところ、急に自分も心臓病ではないかと思い込んでしまい、とたんに心臓が痛みだして奥さんをびっくりさせ、近所の医者に診察してもらったが何の異状もないことがわかった。しかし、本人は自分が心臓病だと思い込んでいるので納得しない。心臓が病むというので、二、三の大学病院で診てもらったが、いずれも異状はないということであった。

それでも本人は相変わらず、自分は病気だとまだ疑っているという。私もお見舞いに行き、「専門医が、異状なしと診断したんだから大丈夫でしょう。」と言っても、

「いや、そうは言っても見立て違いということもある。」

もうこうなると、医者も信じられなくなるようだ。

以前、私の読んだある医学書に、『神経症心臓病』というのがあった。本当は心臓がなんでもないのに、本人の神経がそう感じるだけだが、私は、『思い込み心臓病』と名前をつけた。

考えてみると二年以上も経っている。どうしているかと行っ

⇦（次ページ下段へ続く）

長編詩

美しいわがふるさと古平
むかしと今と未来の詩

土口　川　義　雄

たまには　皆で夢をみよう
ハナからいうのは　おかしいが
人は必ずいつか死ぬ
ンだば　そこからあべこべに
今やることを　考えよう

港町　上から広がる緑の台地
遥か　遥かのむかしから
ここで死のうと　生きようと
ここを愛した人たちの
すべての人の　公園墓苑

春は満山　桜が吹雪き
秋は紅葉が　錦織る
墓石に貧富の差などない
小さく　白く　皆同じだ

流れる小川　野鳥が遊ぶ
児童公園で　未来ッ子が駆け
歴史館で　旅人が感動する
たらつり節もソーラン節も
ほんとの歌なら　みんなきける

ちょい待ち　まだある
すし　三平　鮭のドテ焼き
八角のでんがく　まだ食うか
昔の味なら　みんなある
腕は漁師の　あば達よ

歌碑句碑並ぶ　文学の道
木洩れ日の道は　ワインカラー
日和山ロープウェイが今出るぞ
どだべ　皆さんこの景色
積丹半島　丸見えだべ
サービスコーヒー飲んでけれ

古平美人の古平語
これ程素敵なことばはない
あれがビグニで　あれオダル
あっこがシリバであれなんだケ
鮭トバ噛んでるお客さん
嫁ならここだ　古平だ

佐渡だ越後だ　能登衆もいるよ
秋田山形津軽もいるし
越中富山の薬を運ぶ人は楽土と

讃えてくれた
人に違いは　あるもんか
みんな肩寄せ　力を合わせ
やませを耐えた　人たちなんだ

見知らぬ旅人　わが家に泊めて
おやこ付き合いした人たちだ
なんもないけど　この町は
にしんと人情の二つだけ
それも一つはなくなった

儲ければいいってもんでない
蔵は墓場に運べねべ
どうせやるなら　残すなら
未来の人に夢残そう
百年かければ　何でも出来る
青年たちなら　やってける

ひろっぱがどうでも
ここは　ここ
わかめを生やせ　昆布を植えろ
ガンゼもノナも　わっと来る
頭かき掻き　にしんの奴も
お久しぶりと　けらがかり

人の心は怖いもの
山をけなして　海荒らし
何でそこから　生きられる
ごめんなさいと詫びたなら

（前ページ下段より）
てみたら、意外と元気で、何事も無かったようにケロリとした顔で生活していた。病は気から、とはよく言ったものだ。
病気の本の読み過ぎには注意しましょう。

許さぬ　山も　海もない

何を一体　どうしたのか
われさえ　よけりゃどうでもえ
格好つければ　それでいい
わがふるさとの　動脈の
トンネル何回潰したか

二十世紀は血の歴史
弱肉強食もうやめれ
ここを開いた先人の
尊い汗の　恩は恩
ごだく　並べるつもりはない
顕彰塔に　名を刻むべ

潮の音に　海は明けたべ
若い人　これから頼む
血を燃やし　真の道を突き進め
古平衆であればいい
古平衆を忘れるな

――次号へ続く――

―古平―名産の味をかみしめる

福井幸平

寒修行の声が通り過ぎてゆくこの頃です。

わが体調、今もかんばしからず。だましだまし読書したり、俳句を楽しんでいる。三度三度の食べ物がどうにか食欲を支えている。欠かせぬ梅干し、紅葉っ子、焼き魚などなど、それにしても紅葉っ子が、年中食膳にあるのも不思議だが、茶漬けにさっぱり味が老人の口に合うのかも知れない。

古平を代表する紅葉っ子だが、ながい苦労と努力が今日の製品となり、百億を超す生産高になるとは誰が予想したろう。小さな古平の経済を支える特産品を改めて考えてみたい。

経営者の自費による各地の市場調査や、輸入先の現地まで足を運んで原材料の指導など、大変な努力と研究があったればこそと、心から敬意を表したく、町税、雇用に大きな貢献をしていることも忘れられない。

われわれも応援し、古平の名産をお中元やお歳暮として旅に送ってやりましょう。町民の口こみも大切な効果のある愛情である。

紅葉っ子もからし漬け、わさび漬け、しょうゆ漬けと研究されてる様ですが、油断なく新製品の開発、改良に一段の努力を希望するのも、一老人のつぶやきです。

前述したように小商人の私には、百億という金額は腰の抜けるような？驚きである。

孫の門出を祝う

渡辺ハツエ

私の孫娘が自分で選んだ道。専門学校を終了し、念願の美容院に就職してはや一年が経とうとしています。

就職前ヨーロッパへ研修に旅立ち、帰ってから私のところへ来た孫は、

「お父さんに援助してもらって外国までも行けたのだから、早く一人前の美容師になって、お父さんお母さんに恩返しをしなければならないと思っているの。」

と、固い決意を語ってくれたのが印象的です。

孫が親元を離れ、アパートへ引っ越して自活を始めてから数日後の夜に電話をすると、

「いま、お風呂場の掃除をしていたの」とのこと。私は、即「ご飯を食べたの」と聞くと、「まだなの。掃除が済んだら食べるの」

という孫の声を聞いて、祖母として、なにか胸にこみあげるものがありました。

勤めてから二十日余り経って、私にはがきが届きました。

「おばあちゃんお元気ですか。私は一人で頑張っています。お店が混んでいる時は大変だけど、これが私の勤めなのです。毎日充実しています。おばあちゃん心配しないでね。遊びに来てください。」

と、書かれていました。

孫が自分で選んだ道なのです。辛いことがあってもくじけずに、自分の未来に向かって明るく、希望をもって頑張ってくれることを私は信じています。

昨年六月二十日に二十歳の誕生日を迎えて、社会人として歩んでいます。『成人の日』の祝日行事には、仕事の都合上出席

⇦（次ページ下段へ続く）

故郷を偲んだ佐渡人会

竹内コト

丸山町の住宅に住んでいたころですから、もう三十数年も前になりますが、ある日、姑さんから、「私も齢だから、私に代わって佐渡人会に出てくれないか。」と言われました。

佐渡人会というのは、昭和のはじめころにつくられた『新潟県人会』のことなのですが、佐渡出身の人たちは、この会を佐渡人会と言っていたようです。

佐渡出身の人たちをふくめて古くからある親睦会で、当時でも、会員はたしか五十五人ほどいたように思います。

実際に佐渡や新潟から移住して来たという人はもうごく僅かしかいなくて、二代目・三代目という人が多かったのですが、それでも高齢者の会員もおりました。会はずうっと続いていましたが、戦争で一時中断していました。その後、また活動を始めたそうです。

この会は新潟県の出身でなくても、新潟県に親戚などがあって、希望すれば会員になることができ、前は会員も百数十人いたということです。

私がいったときは、会員数は五十五人ほどおりました。昭和五十五年当時の会長さんは㋚斉藤さんのおじいちゃんで、亡くなってからは横河自転車屋さん、次に本間市太郎さんと続きましたが、本間さんも高齢であり、また会員数もだんだん減ってきて、昭和六十三年二月十五日にとうとう解散することになりました。

私が入ってからでも、そのころの十一人いた役員の人が七人も亡くなりましたし、そのほかに二十五人もの会員が亡くなっています。女性で役員をしていたのは私一人でした。

今でも、浜町の㋟渡辺さんの奥さんのところへ行くと、きまって佐渡人会の話がでます。

「佐渡人会がなくなって寂しくなったね。」

たぶん会員の皆さんは、そう思っているのかも知れません。

当時は、花見の季節になると総会を兼ねて日帰り旅行や、町内のお寺や野外での楽しい親睦会がありました。

また、どこへ行くときでも、新地町の服部さんが写真を撮ってくれて、私のところにも大きいのが十枚くらいもあり、たまにそれを出してきては思い出にひたっています。

その中の正隆寺の境内での花見の写真には、新地町の後藤呉服屋さんのきみさん、吾のばあさん、港町の岩崎倉治さん、大地由蔵さん、向日チヨさん、相良雄治さんなど、懐かしい人たちが写っています。

佐渡人会は利益を図る団体ではありませんから、集まるといつも故郷の話で、皆さん楽しさでいっぱいでした。

―― 続く ――

（前ページより）

出来なかったが、孫には、これからも自分に課せられた仕事に忠実に、責任感を大切にする大人になってもらいたいと思っております。

成人になった孫に贈る言葉

成人おめでとう。
これまで育ててくれた
お父さんとお母さんに
感謝して、夢に向かって
大きく羽ばたいて行って
ちょうだいね。
これからも、周りの
皆さんとの和を大切に、
優しい心で接し
そして、自分には厳しくを
信条にがんばってね。
成功を祈っています。

祖母より

俳句

古平ホトトギス会

旅行村夜間スキーの灯のともる　斉藤波留

雪始末済ませ途端に屋根雪崩　仲谷比呂子

長椅子を父に占められ五かん日　仲谷安代

寒行の先頭にたつ句友かな　福井幸平

北狐真昼の道を振り向けり　山口悦子

時化の日に新年会をすることに　大和田絵伊

除雪車に目覚めてからのひと寝入り　大島喜恵

網すけそ豊漁にして値のくずれ　仲谷美砂

息子の家に十日ばかりのお正月　山口浪

月見橋運河に浮かぶ春の月　水見句丈

雪早き予感のあたりさうな雨　中村樺宵

十五夜の海原広く波遊ぶ　越野清治

秋惜しむ空にかすかな昼の月　外山俊久

椴松の色を残して冬に入る　西島サツ子

嫁ぐ娘の近くなりたる初便り　よしざきり

星降るよ眼獅子座にに向けしまゝ　岩瀬みのる

もぐったりおよいだり友だちとプール　小五年　水見翔人

きんぎょよくうごいているよきんぎょばち　小一年　水見玲央

――訂正してお詫びいたします――

㊣煤払い姉さんかぶり亡母の顔　山口悦子

㊥煤払い姉さんかぶり亡母

古平町岬短歌会詠草

油絵の吾らにぎやかに新年会久々の友や老い初し師の君　長崎フユ

南天の鉢に咲きたるかたばみの桃色の花夕べは閉じぬ　東　美知

身の丈の雪の向かふより隣人が風邪ひかぬかと声かけくるる　鈴木時子

役場前の大銀杏に灯るイルミネーション喜々として児ら帰るともせず　竹内コト

まゆ玉を居間に飾りて見上ぐにゆうらり廻る打出の小槌　堀　典子

海猫の群れが空暗めこし幼日を思い出でつつ齢重ねきつ　池田テル

息子等に話題を合はせ無理をして正月のテレビ付き合ひており　田中香苗

雪深きニセコ山系の宿に来て孫らと熱き露天風呂に入る　榊　佳代

雪の中餌台の屋根に立つトビの足元にあはれ雀動かず　丹後初江

しんしんと昨夜降りにしかつもる雪窓にし見居る元日の朝　金杉すみ

小さき足に行く手の落雪を踏み固め「どうぞ」と言ひし児らのやさしく　奥山きよみ

幸記子さん成人となり初めての化粧に少しはぢらひ見せて　魚屋友子

除夜よりの降りし雪は杜清め町をあらたに年はあけたり　山口スヱ

川柳

石井愛子

老岩が荒波に耐え寄りそうて

同期会はだかに戻る温泉場

思い通りならぬ夢抱き老いになり